

\* 私たち人間は、何にも頼らずして生きることにはできません。様々なものに頼って生きています。これは、だれもが理解できることではないでしょうか？神様はどのようなお方でしょうか？J・I パッカーは「神は自存できるお方。」だと言っています。聖書の示す神は創造主ですから、もちろん自存できるお方なのです。

そんな自存できる神様は私たちを救うために、イエス・キリストを送り、私たちに寄り添ってくださったのです。自分が非難されることを恐れずに、罪人を救うために近寄ってくださるお方なのです。今回の聖書箇所ヨハネ4章はまさにイエス様から罪人に近寄って下さっている姿が描かれています。

イエス様は、律法学者たちと衝突を避けるためにユダヤを去り、ガリラヤへ移動し始めました。この当時、サマリヤ人とユダヤ人とは関係が良くありませんでした。特にユダヤ人は、混血民族のサマリヤ人を罪人扱いし、ユダヤからガリラヤへ旅をするときは、必ずサマリヤを避けてわざわざ遠回りをしていました。しかし、イエス様はこのサマリヤの女を救うために、あえてユダヤ人が避けるサマリヤを通られたのです。このことがユダヤ人たちに伝われば、イエス様は非難されるのは当然でしたが、自分自身が犠牲になることを覚悟でその道を選ばれたのです。そしてサマリヤの女に「水をください」と声をかけ、近寄り、ゆっくり関わりを持ちました。イエス様は彼女の罪もすべてご存知でしたが、彼女自身の口から罪の告白をするよう導かれました。その結果、この女はイエス様の愛を体験し、永遠の泉のいのちを受け取り信仰に入ったのです。

今日の箇所をポイントでまとめます。

- 1、人は愛され受け入れられてこそ罪を認めることができる。
- 2、受け入れられた結果、素直に罪を告白し、永遠のいのちの泉を素直に受け取れるようになる。
- 3、罪を告白し、救いを受け取った人は他の人に伝えずにはいられなくなる。

このポイントが大切です。イエス様は、罪人をさばくためにこの地上に来たのではなく、神の在り方を捨てることができないとは考えず、救うために来てくださったのです。そして、私たちに寄り添ってくださったのです。私たちは、そのイエス様の愛を素直に受け入れ続ける者でありたいです。そのためにはイエス様の愛の源にとどまることです。具体的に言うならば、礼拝を大切にすること、御言葉を慕い求め続けること。御言葉を実践することです。泥のはいったコップの水をきれいにするには、永遠に湧き出る泉の元にコップをとどませ続けることです。私たちもこの永遠の湧き出る泉にとどまり続ける者でありたいです。